

森づくりの最前線

静岡森林管理署 表富士森林事務所 森林官 松熊 邦友



管内から望む田子の浦

私の勤務する表富士森林事務所は、富士山の静岡県側、標高800㍍から3200㍍の間に扇状に広がる富士山国有林約12,000㍍のうち、約3,700㍍が担当する国有林（以下、「管内」という。）で、管内には日本の道100選に選ばれた富士山スカイラインや富士登山の富士宮ルートを含んでおり、晴れた日には万葉集におさめられた山部赤人の和歌で有名な田子の浦が管内から望めます。

富士山は日本を象徴する山で、国内外から多くの人々が訪れます。特に最近では、富士山の自然を体感するレジャーとしての利用が増加しており、今年の夏山シーズン（7月1日～8月31日）の登山者は、全体で30万人を超え、管内の富士宮ルートについても8万人近くの利用者がいます。

富士登山は、もちろん頂上を極め、ご来光を浴びるのも大きな目標ですが、富士山麓の遊歩道を利用した森林散策という楽しみ方もあります。管内には、いくつもの遊歩道が整備されており、特に私のイチオシは、西臼塚遊歩道とその周辺の森林です。この一帯は、ブナ・ヒメシャラ・カエデ類といった自然の森から、ウラジロモミ・ヒノキといった人の手で育てた森まで多様な森林で形成されており、また、過去に富士山麓で噴火した跡地も見ることができる盛りだくさんの内容となっています。



西臼塚遊歩道周辺の森

業務面では、現在、「第4次富士森林計画の樹立・策定」という今後五年間の森づくりの方針を決定する作業を進めているところですが、その一環として管内の状況を把握する中で、全域にわたってニホンジカによる被害が目立ち始めたことが非常に気がかりです。

富士山周辺のシカは、平成18年度に静岡県が実施した調査によると約1万頭生息していると推定されており、現状においてはその数が減少する要因も見あたらないため、今後もニホンジカによる被害が拡大していくことが懸念されます。当事務所では、ニホンジカの被害対策として、木の幹に保護資材を巻くなど対応しているところですが十分ではなく、被害の拡大を防ぐために、頭数の調整といった積極的な対策が必要だと感じています。

現在、地元の猟友会などの協力を得て、管内を含む富士山麓南西地域において年間数百頭規模のニホンジカの捕獲を行っておりますが、被害の拡大を食い止めるまでにいたっておらず、今後は関係機関と、より緊密な連携をとってニホンジカと共存できる富士山の森林づくりの方法を考え、実践していきたいと考えています。



シカにより被害を受けたヒノキ



シカ被害対策として設置した保護資材